

# 比庵佳境の会

ひさかたの 四方の白雲 波打ちて 四方の紅葉の うつくしきかも

比庵九十



四方の紅葉

昭和47年

## 清水比庵 家族への愛情（両親・弟妹）

清水 圃（会長 比庵の孫）

清水比庵は芸術作品だけでなく、まどかな人間味も多くのファンを集めた背景となっていた。家族に対してもその中心として皆に慕われた一生だった。本章では両親、弟妹との温かい交わりについて述べる。（妻と娘については前号までに記載したので除いた。）

### 一 父 質（ただし）

備中松山藩の貧乏士族出身の父質は比庵が地元高梁中学に入ったころ四十六歳で亡くなった。漢詩を学んで号を「溪外」と称した。漢詩を紙に大書して襖に張って眺めていたので長男の比庵も傍で字を書いたが、それを見て「この子も字が下手だと嘆いていたよ」と比庵は話している。

「和紙を綴じた手製の帳面にぎっしりと細かい字で漢詩が書かれているものを父（比庵）は大切にしていたが、表紙には溪外遺稿と記してあった」と娘明子（私の母）が語っている。比庵が書の道に進むスタート点は父質であつたようである。

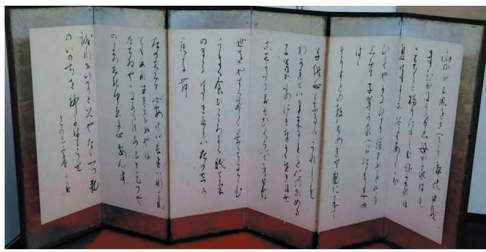
・わが父の命終りし 齢とも  
われはなりけり あはれなるかも

### 二 母 スエ

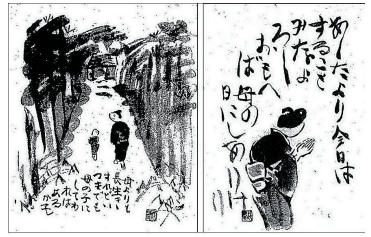
比庵の母スエは昔の士族の妻女を想わせる



風格をしのばせた美人であつた。しかし夫の死で一家の大黒柱を失った苦勞は大変で、長男の比庵は某家の書生に住込み、スエは比庵以外の子供三人を抱えて夫の勤め先であつた笠岡の借家で針仕事で糊口をしのいだ。  
比庵が大学を出て結婚、そして司法官から銀行員になって東京に移ったのに伴って弟妹達も笠岡を離れて東京したが、スエは一人笠岡にとどまった。比庵は生活費は勿論母の日常生活に気にかけていた。銀行員時代に比庵が母に贈る歌十首を書いた小屏風には笠岡で一人暮らしの母を想う若い頃の比庵の気持ちがよく出ている。この屏風をスエは大切にしておいた。この屏風を見せられていた。スエが亡くなった時に形見分けで末弟の浩（三溪）がこの小屏風を貰い、後年比庵が世話になった母親孝行の日興証券初代社長遠山元一氏に贈られ、現在遠山記念館にある。三十歳代の比庵の貴重な文獻である。

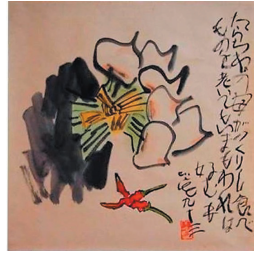


母に贈る歌  
山行三首を夫に贈る詩を  
妻に贈る詩を  
「この歌を贈ったのは母が比庵に  
夏はもてしななかな  
ひるもたはらばまをたしそ  
きりすの歌もあれ親にきて  
子供心ながらしよ  
わかれはまにまをたしそ  
こしかたにおもくつての目録  
世帯をすげく来てはなむ  
うすくははこよく遊んでみるに  
はたらき同ればたのむか  
たのむか安心は生かすは  
わすれずおれ生かすは  
たのむか安心は生かすは  
たのむか安心は生かすは  
たのむか安心は生かすは  
比庵が若い頃 大正時代に独り  
住みかいてる母に十首の歌を  
屏風に書いて贈ったもの



週刊朝日挿絵(昭和29年 72歳)

右 あしたより今日はすることみなよろし  
おもへば母の日にしありけり  
左 母よりも長生きすれどいつまでも  
母の子にしてわれはあるかも



たらちねの  
母がつくりし  
食べ物を  
老いても今も  
われは好むも  
比庵九十三

を自分の母を想って描いたと玉堂に伝えている。

晩年スエは体調を崩して家が広がった次男都のところに移り大正十四年六十三歳で亡くなった。

・日の日中 草にくぐりて ひそみもだす  
小鳥のごとく 母の喪に居り (大正十五年正月)

・古いぬらば おのずからにも わが顔の  
やさしくなりて 母に似るかも

### 三 弟妹

次弟 清水都(いく)

末弟 清水浩(こう) 号は三溪

比庵は幼くして父を失った弟妹を父親代りになって経済面を含めて面倒を見た。司法官から銀行員になって東京九段で生活していた時は次弟都が家の近くに下宿して食事は比庵

宅でとり、妹章子は同居して和洋裁縫学校に行っていた。家計が苦しいので比庵は夜間学校の教師もしたし、銀行へは四十分を歩いて通ったが、妻の鶴代はやりくりで大変だったようだ。都が義姉鶴代に「兄貴は無心に行くと思議に何時どんなときにも金を持っていった。偉いものだ。」と言った。その後末弟浩の勉強費用も負担した。このため弟妹達は長兄比庵に対する感謝の気持ち忘れず後にそれぞれ比庵を助けて比庵芸術の確立に貢献した。

### 三― 次弟 都

都は兄妹四人の中でただ一人芸術方面に手を付けなかった。弁護士として活躍し、逗子に広い持家を建てた。



大正3年 都と明子

家が狭い比庵に代わって晩年体調を崩した

母親を引き取り、また娘二人が比庵の娘明子と仲が良いこともあって交流は密であった。

志賀尚を明子の婿として紹介もした。昭和三十九年比庵八十二歳の時に亡くなった。

四人兄弟の最初の死を悼み比庵は次の歌を残している。

・年老いて 四人揃ひて ありけるが  
その喜びも 今日までなりき

### 三― 妹 章(子)

章(子)は頭脳明晰で鋭い判断力と勇氣をもった男勝りの女性であった。笠岡の呉服屋の嫁になって夫を助け家業に励んだ。子室に恵まれなかったが人の世話を良くして周囲の人々に尊敬され慕われていた。また書を良くし和歌



39 10 20 章子別邸にて

に秀いで、比庵の大きなサボターであった。突然妻に先立たれたら然となくなった比庵を故郷笠岡に呼んで温かい手を差し伸べ、戦争中は比庵一家は笠岡への疎開で大変世話になった。戦後東京駒込に居を移してからも比庵は一年の三分の一を笠岡の章の家で過ごし、三芸を磨き上げていった。

章の歌と書を比庵が川合玉堂に紹介すると玉堂は大いに感銘して章との合作を毎年作るようになった、病弱な章の為に比庵は玉堂からいただいた作品や自分の作品を章に預けて楽しませていた。

章は亡くなる前に見舞いに訪れた明子に「比庵は清水家の宝だよ。」と言っている。昭和四十年に亡くなったが、比庵は章の生前の希望通り分骨して清水家の墓地に章の墓を作り、墓碑も書いていた。

・あたゝかき 人にかこまれ 惜しまれて  
且つ仰がれて しあわせにねむる

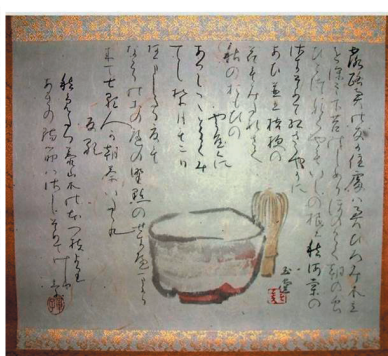
兄比庵

玉葱と唐辛子  
画 比庵 歌 岡本章



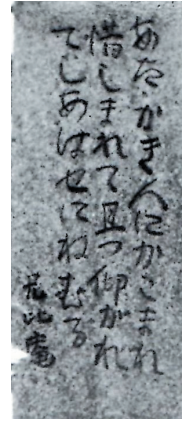
こはる日の  
ひさしむくとて  
垣の木に  
ざるや飯ひつ  
かけならべたる

章の死から半年後の昭和四十一年、比庵は宮中歌会始の召人に推挙される栄誉を受けたが、その時比庵は「章がせてもう半年生きていたらなあ。おれは章に一番見て貰いた



茶事 画 川合玉堂 歌 岡本章

露路奥の友が住処は 奥ひろみ 木立を築み 下苔の  
しめりほけく 朝のむしひちなきる いしの岩に  
秋海棠も 咲きそめて 紅さやかに あり並び 桔梗の花も  
乱れさく 秋のすがたの ややくくに 暑し事と にくせし  
葉月も二日 あましたる 夏もなりの この庭の 野点の塵入  
まかりきて 七歌人が 朝茶いたく  
反歌 秋めたつ 泰山木の ぼつ枝より  
あさの陽筋は さしそめてけり



章の墓標

かった」と話している。

三十三 末弟 浩 (三溪)

比庵より十四歳年下の末弟浩は中学から大学まで比庵が面倒を見た。大学時代に銀行員だった比庵から浩宛ての葉書(絵手紙)が多く残っているが、比庵が父親代わりであることがよくわかる。

浩は大学卒業後実業界に入って活躍したが、比庵の作品が大好きで自分も画を良くし、号を三溪と名乗った。(父溪外の三男の意味)



兄弟の作品展会場にて

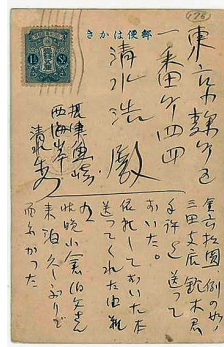
そして比庵の芸術活動を助け共にあゆんだ、そのなかで特にポイントとして挙げられるのは次の三点である。

- ① 日本画家の巨匠川合玉堂を紹介した。
- ② 比庵 / 三溪の作品展の母体「野水会(やさいかい)」を作り川合玉堂の賛助を得て作品展を毎年開いた。第一回は妻の急死で落胆している比庵を奮い立たせた。
- ③ 比庵八十八歳の喜寿を祝い、比庵の歌・書画を集めた美術本「野水帖」を作った。



三溪に送った絵手紙

大正時代 魚崎



比庵没後晩年は比庵の作品を東京祖師谷の自宅の玄関・座敷・居間・寝室に飾り、比庵と過ごした楽しい思い出の中に生きた。

- ・床の間に 合作をかけて 在りし日の比庵と遊ぶ 三溪八十五(比庵没後六年)



三溪の作品

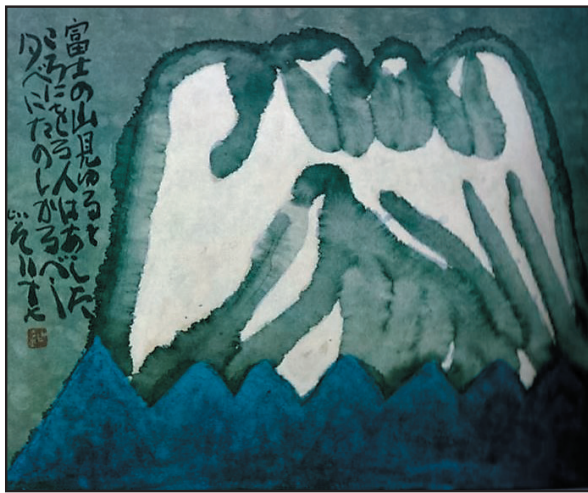
清水比庵の歌 (一)

秋葉 貴子  
〔窓日〕 編集長)

富士の山見ゆるところにをる人はあした夕べにたのしかるべし  
比庵の描く富士の画には独特の味わいがある。

その比庵富士は窓日誌の表紙として度々使われてきたが、どれ一つとして同じものがない。山容、色彩、背景とて何れも異なる。

あるものは気高く、優しく、また輝きに満ち、時には童画めいた趣きも、その時々、心に映じた富士山を想いのまゝに描かれており、描くことを楽しんでいたようだ。表出の一首は、富士山を詠んでいるが、



多くの富士の画に賛として添えている。何とユニークな歌であろうか。「富士山の見える所」に住む人を羨んでいるのである。

この歌では「あした夕べにたのしかるべし」がものをい、霊峰富士と崇めたり、礼賛するでもなく、人々の日常の中に存在する富士山を楽しみみの対象としている。歌がちまちましていない。俗から脱した比庵流の度量の大きさを物語る歌である。

註 「清水比庵の歌」は短歌誌窓日に連載中のもので、秋葉先生のご了承のもと本会報に今後連載いたします。

## 比庵作品との出会い

中山 洋子

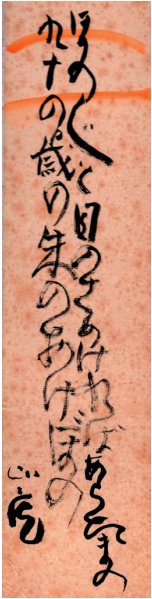
(麗筆会主催)



ほのぼのと紫にほふ朝ぼらけ  
うぐひすの声 山より聞こゆ 比庵  
かなの本の中で書の文字よりこの歌の優  
雅さ、絵のような美しさに、作者比庵とは？  
と想像を重ねるこの歌との出会いでした。そ  
の後も数々の比庵の歌に、平安のかな文字の  
中に、紫にほふ景色を思い浮かべておりまし  
た。

偶然にも横浜市栄区の私の住所の近く  
にお孫さんの清水固様がお住まいになっ  
ており、近くのお寺光明寺での比庵作品公開  
(二十六年秋)で思いがけない本物との出会  
いです。歌・書・画と九十歳過ぎてでも力強い  
様々の作品に唯々驚きと感銘を受けました。  
その後栄区市民文化センター「リリス」で  
の作品展(二十七年秋)には少しお手伝いが  
出来、書の仲間に声をかけ、大変な反響を呼  
び私の所属する書道団体の広報誌に研修会と  
して固様のギャラリートークと富士山の画を  
掲載させていただきました。

書道は古典を学び、基本から正確な運筆、  
独創の芸術へと進む世界ですが、比庵作品は  
それを乗り越え、個性そのままを自由奔放な  
表現で見る人にほとぼしる芸術を投げかけて



います。作品  
展を御縁にた  
くさんの資料  
をいただき、  
さらにその人  
柄に触れたよ  
うな気がいた  
します。

おじいさまを尊敬し、作品を多くの方々  
に伝えたいと懸命に公開展をなさる固様、関係  
者の皆様に心打たれる一人です。

比庵は岡山市高梁市のご出身とのことだ  
が、私の友人に高梁市出身で北海道在住の方  
がいて、若い頃比庵のお茶会か何かの行事で  
お手伝いをしたその場で、関係者の方からこ  
の娘さん達に何か書いてください。」との一  
言で、その場で短冊に書かれたものを私に送  
っていただきました。その歌は

ほのぼのと目のさめければ あらたまの  
九十の歳の 朱のあけぼの 比庵

そしてご実家にも

水清き川の流れて山高し

日は山を出で 川をわたるも

の書が飾ってあるとメールで写真を送って下  
さいました。

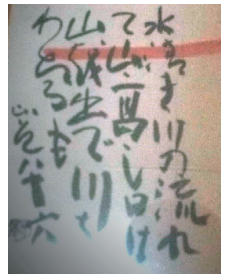
私は一度高梁に旅したことがありますが、  
本当に静かなしっとりとした風情のある城下  
町でした。きつとこの街を詠まれた歌ですね。

註この歌は昭和四十三年の宮中歌会始  
の御題「川」に因んで詠んだもので、  
高梁市の備中松山城に登る途中の輪  
峠に歌碑として残されている。

私も書を通して色々な作品や人に巡り合  
い勉強しておりますが、書で心を伝えること  
は遠い道程です。比庵作品を

拝見して、内に秘めた知識、  
努力そして環境すべてが天真  
爛漫で、芸術の世界を心から

楽しんでる姿勢を学び、こ  
れから気負わず筆を持ちたく



なりました。  
「比庵佳境の会」の貴重な会報に私の拙  
い文章を載せて下さいますこと、心から御  
礼申し上げます。何時の日かどこかで比庵  
の書に出会えること、又旅の夢がふくらん  
で参りました。

## 清水比庵展のお知らせ

### 一 吉備路文学館

岡山市北区南方三二五二三三  
(086-223-7411)

開館三〇周年特別展 「清水比庵と川合玉  
堂展」  
併催企画展「秋田秋良日記をめぐる歌人た  
ち」清水比庵・金光碧水・中西稲影・原田  
進・三浦敏夫・若山牧水

期間：二〇一六年一〇月十八日(火)～  
二〇一七年一月二日(日) 9:30～17:00  
休館日：毎週月曜日(祝日は開催)、祝日の  
翌日、年末年始

関連行事① 一〇月二十九日(土) 13:30～  
15:00講演会「玉堂と比庵」講師：清水固氏  
(比庵の令孫)

関連行事② 十一月二十七日(日) 13:30  
～15:00講演会「父秋良を語る」  
講師：秋田征矢雄氏(秋田秋良の三子息)「秋  
田秋良をとりまく備南の歌人たち」講師：遠  
藤堅三氏(吉備路文学館前館長)

### 二 横浜市上郷地区センター

横浜市栄区上郷町一七二二五  
(045-892-8000)

清水比庵展 「上郷地区センター」主催、「比  
庵佳境の会」協力(作品と絵手紙を展示)

### 三 横浜市墨の美術館

横浜市青葉区みたけ台一一一三三  
(090-3439-5014)

第三回清水比庵展 墨の美術館主催  
(未発表作品)  
期間：二〇一七年一月二日(土)～二九日  
(日) 10:00～17:00

交通：田園都市線青葉台駅で下車、一番バス  
乗場から「藤が丘行」バスで「桜台第二公園」  
下車二分

墨の美術館は開館以来新年は清水比庵展で幕  
開けしております。(今回は三回目です)

期間：二〇一七年一月八日(日)、九日(月)、  
祝日) 9:00～17:00(九日は19:00まで)  
交通：① JR根岸線(京浜東北線) 港南台駅  
より神奈中バス(港86・40・36・37  
系統) 中島下車五分  
② 東海道線横須賀線大船駅(笠間口)  
より神奈中バス(船07・08系統) 中  
島下車五分  
講演会「比庵と正月」 講師：清水固 一月  
八日 13:30～15:30

会費納入のお願い  
28年度の会費を下記に納入されますようお願いいた  
します。  
一口 1000円(複数口歓迎)  
三井住友銀行鶴見支店普通 7061558  
名義：クボタノブユキ

**比庵佳境の会**

会長 清水 固(清水比庵の孫)

〒247-0022 横浜市栄区庄戸 3-5-18

TEL&FAX 045-893-8932

URL: <http://www.hat.hi-ho.ne.jp/katashi-shimizu/>

事務局：村上 信行

〒247-0022 横浜市栄区庄戸 4-4-2